巻頭言

次に何をすべきか What's Next for New JAWE?

山田 均*

Hitoshi YAMADA

H22 年度選出の代表委員の就任のお願いが終わり、旧風工学会から社団法人として新しい風工学会への大きな動きが静かに始まっております。新しい風工学会と言っても、資金不正など背景にした法律改正によるところが大きいのはご承知の通りですが、この機会を積極的に捉える方が妥当であり、好事家の集まりから、世間の需要を背景にした事業展開を可能とする責任ある団体と変化したと認識すべきであろうかと思えます。藤野前会長の時代に、私は、次の数年を見通した「風工学会の将来構想」に関する提言をさせていただきましたが、その中でポイントとしたかったのは「風工学会の意義」です。現在の業界を取り巻く経済状態では「学芸会のような研究成果の討論会」や「古き良き時代を懐かしむサロン」のような批判を周辺から受け、学会を離れる方々が多くなっているのは事実であり、残念なことです。しかし、IAWE 会長の田村幸夫先生が主宰される東京工芸大の GCOE の成果例を見るまでもなく、我が国の風工学に関する情熱が世界を率いてきたのは事実で、JAWE がその研究者集団としての役割を設立当初から求められ、今日まで継続しているのは先輩先生方の努力の賜物と認識しております。

では顧みて自らを含めた学会への現状意識はいかがでしょう。実はこの原稿を書いているのはベトナムの某市です。海外に出かけるのは講演か、国際会議と相場が以前は決まっていたましたが、このところ国際交流の活性化がほとんどであり、創立 15 周年を祝う式典への出席要請が理由です。ここで現地の技術者から聞くのは、問題が生じていると噂の吊橋でモニタリングをしようとしているけど「測るだけのモニタリングでいいのか」とか、計画中の某斜張橋でフィンランドのコンサルが全橋風洞試

験を前提に設計しているが「なんとかならないか」とか、どこも同じというか、繰り返した議論をしているかなという状況です。

そこで思うのは、現地で日本の信頼性、先進性は十分理解されているものの、JAWE がなぜ主導権がとれないかということです。昔（今もそうだと思います）アメリカの学会で議論されていたのは、是非世界で主導権をとって活動の場を広げることであり、そのための働きかけをしようということでした。社団法人化された JAWE は、この議論をすべきかと思い、先の「風工学会の将来構想」に関する提言をかきました。世界中の学会で同様な切り口ですでに議論し多くの施策を持って画策し、多くの場合うまくいかないことも承知しております。しかし、それであっても、JAWE がアジアで世界で互恵関係を保ちながら信頼関係を築き、JAWE のメンバーであることが誇れるような組織にしたいし、それが学会の価値だろうと思っている次第です。

* 横浜国立大学大学院 教授
Professor, Yokohama National University